中野重治展

正津勉が選んだ10点

キュレーション　佐野周一

詩を読む歓び

中野重治、ながらくその詩を読みついできた。重治詩は、多面体だ。政治的でもあり、叙情的でもある。剛直なるかと、心優しくある。野太く、繊細な。いまここでその詩について語るのはやさしくない。

いったいぜんたいその魅力はどこからくるものか？このことに関わり思い出されるのは、「無骨なやさしさ――越前丸岡霞ヶ城」なる一文である。中野さんは、故郷の城について「実用的なもので」「無骨で木訥（ぼくとつ）なところがある」「美術以前で」「装飾ということをまだ特殊に考えなかった時期のやさしさのようなものがある」と。しつこく熱っぽく語っている。

どんなものだろう。ここにいう「無骨なやさしさ」、それこそそのまま中野さんの詩作にあてはまらないか。中野さんは歌った。「胸さきを突きあげてくるぎりぎりのところを歌え」（「歌」）と。

『中野重治詩集』、心が屈したときは、手に取ってほしい。ここにはたしかにある、詩を読む歓び、というほかないものが。

正津　勉

4月8日（金）～5月29日（日）ONOメモリアル

インスタレーション　戸田正寿　　主催　坂井市・坂井市教育委員会